



弦楽器の聖地をめざして

みささ美術館・ヴァイオリン製作学校

(鳥取県三朝町)

香川詩保里

鳥取県東伯郡三朝町の温泉街の一角に、今回取材したみささ美術館はあります。

みささ美術館は、弦楽器（ヴァイオリン、ヴィオラ、チェロ、コントラバス）の製作工程の紹介やレプリカのヴァイオリンなどが展示された、いわば「弦楽器製作の美術館」です。弦楽器職人の岡野壮人さん（32）が二〇一三年七月から館長に就任されています。美術館の敷地内に鳥取ヴァイオリン製作学校があり、一人の生徒さんが楽器を熱心に作っていました。

私は高校時代、管弦楽部に所属しており、楽器のメンテナンスで岡野さんにお世話になったことがあります。岡野さんがなぜ三朝を活動拠点とされているのか気になっていたことから取材を思い立ちました。

木の箱の不思議に魅せられて

鳥取ヴァイオリン製作学校内の、木の香りのする岡野さんのアトリエでお話を伺いました。

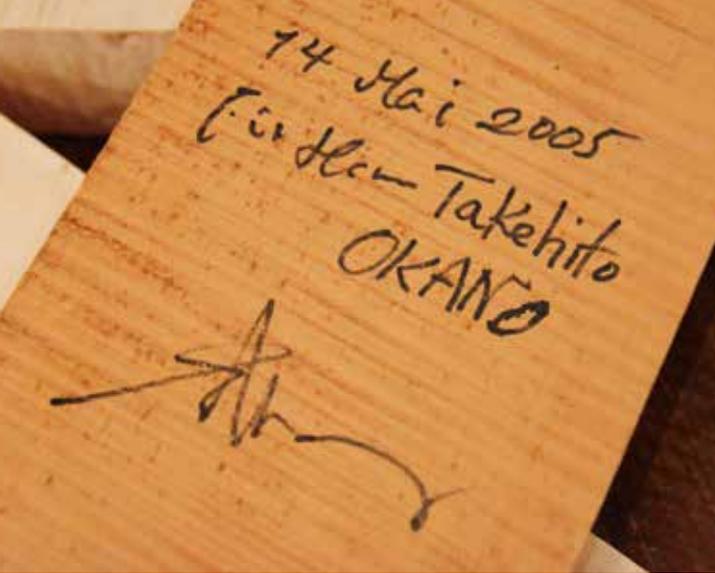
岡野さんは倉吉市出身。小学生の頃から木工工作が好きで、家具職人など木工に関わる仕事がしたいと思っていたそうです。また、岡野さんのお母様はピアノの先生、弟さんもピアノを習っており、音楽には縁がありました。ヴァイオリン職人を志すきっかけは、中学二年のときにクラシックコンサートに行ったこと。木の箱から出た音が、ホール中に響いて



いるのが不思議な感覚だったそうです。「どんな構造をしているのだろう」と思ったことから、ヴァイオリンを作る職人になろうと決心。日本で唯一、徒弟制度を導入する「東京ヴァイオリン製作学校」を知り、中学卒業後、無量塔蔵六さん（親方）に弟子入りしようと思いましたが、親方から、高校は卒業することと、ヴァイオリンを弾けることを条件に出されませんでした。そこで、高校時代は週一でヴァイオリンのレッスンに通い、毎日四時間練習し、高校卒業後は念願の弟子入りを果たしました。

努力を重ねた修行時代

岡野さんの弟子入りした「東京ヴァイオリン製作学校」は徒弟制度で、生徒を毎年四人までしか受け入れない少人数制



■ (左上) 岡野さんと無量塔さんのサインが入っている、上質な材木。(右下) 製作途中のチェロを持つ岡野さん。(左下) ニスの塗られていない真っ白な指板。

の、ヴァイオリン製作を専門的に学べる四年制の学校です(現在は廃校)。無量塔さんは、日本人で唯一、国外のヴァイオリン製作コンクールの審査員をされている、日本を代表する弦楽器職人です。「親方は江戸っ子で激情型の人だったから、理不尽に怒られることもあった」と岡野さん。入学して最初は必死で基礎

を勉強し、一年半でヴァイオリン一本を製作し、二年の先輩に追いつくほどの技術を身につけました。熱心に製作に取り組み、進んで雑用もして、親方に認められないことも教わりました。四年が終了後も一年半は無量塔さんのもとにとどまり後輩指導や楽器製作をし

ますが、もう一人の師匠、アンドレアス・プロイスさんと出会い、更に四年間の修行とフランス研修を経て独立します。

ヴァイオリン職人の仕事

ヴァイオリン職人の仕事は、製作・調整・修理・修復の四つに分けられます。

調整は、ヴァイオリンの美しい音色を保つための作業で、具体的には弓の張替えや、ヴァイオリン本体の中心部に立つ「魂柱」という木の棒の位置の修正などです。

修理は、ヴァイオリンの音色に影響するような物理的な問題を改善することで、具体的には割れ目を継ぎ合わせる、欠けている部分を補強するなどです。

それに対し修復は、一言でいえばオリジナルに限りなく戻すことです。具体的には割れ目を肉眼で見えないようにする、木の年輪を描いて復元するなどです。

岡野さんが学生時代、特に興味を持っていた仕事は修復でした。「ヴァイオリン・ディストレーション」という本を読んだことがきっかけで、修復に興味がありました。木の年輪の模様を描くなど、一番不思議で面白いお仕事だと思いました。

岡野さんの専門は楽器製作です。特にガルネリ・デル・ジェスという、イタリヤのクレモナ出身のガルネリという製作者一族が製作したヴァイオリンモデルのレプリカ製作をされています。約三百年前の製作法で作るため、使用される道具

も当時のものを再現して製作されています。「ヴァイオリン本体の裏板と表板のフォルムは異なり、左右も均等ではないので、ある程度フィーリングで作る。機械では出来ない、ローテクならではの仕事です」とおっしゃっていました。その他、フルオーダーでの楽器製作もされていますが、製作はなんと二年待ち。いかに岡野さんの職人技術が素晴らしいのかわかります。

アトリエでお話を伺った後、^{かん}鉋で木の表面を削る作業を少しだけ体験しましたが挑戦しました。すると、「あれ？削れてない」。もう一度。「まだ削れてない」。何度かやって、微妙に削れました。「本当に不器用なんですわ」と職人のお墨付き(?)を頂きました。ちなみに、取材に同行していた倉上さんがやってみる





■(右上)アトリエにて岡野さんのお話を聞く取材班。(右下)チェロと材木。(左)木の表面を削る岡野さん。

と、とてもきれいに削れていて、岡野さんにも褒められる腕前でした。

地元・倉吉にアトリエを作る

「地元に戻ってくることを前提に弟子入りしたんです」。ヴァイオリン職人は東京でアトリエを開く人がほとんどだと聞いていたので驚きました。また、岡野さんのように弦楽器製作がメインの職人は全国でも稀で、普通は駒や弓などの製作がメインです。学生の頃から「弦楽器の文化を地元にも広めたい」という意志を持って修行をされていたのだと知り、

すごい方だなと思いました。

二〇〇九年、岡野さんは結婚と同時に地元・倉吉に帰り、実家の倉庫を改造してアトリエにしました。「何もないとこるか一つずつやっていくしかない」と決心してのことでした。最初の三、四ヶ月は無収入。「始めた頃は、やっと独立して一人前になったつもりでいた。良い楽器を作りたいという理想を持っていて、お客さんの求めているものと食い違っていることもあった。プライドがあった。お客さんとは楽器の話しかせず、ものごとを利己的に考えていて、エゴの塊でした」。上質で高価な素材にこだわり、製作していました。

ですが、徐々に自分のやり方に違和感を覚え始め、「誰のために楽器を作るのか」を考えるようになったといえます。「かっこつけるのをやめて、お客さんが必要としているのはどんな楽器かを考え、使いやすさを意識して作るようになった。利己的に考えるものごとでは上手く進まない。他の人のことを考えて仕事をすると、不思議と上手くいくんです」とおっしゃっていました。

技術で判断されるのが嬉しい

現在は、昔よりも安い素材を使いつつ、質を落とさず技術でよいものを作ろうと

考え、楽器製作されていきます。楽器

のことで、以外に他愛もない会話をすること、お客さんの好みや性格を知り、その人に合う楽器を作るように努めているのだそうです。「少しの工夫で使いやすくして、お客さんに喜ばれたとき、やってよかったと思う」。話を聞いて、職人は、楽器だけでなく人との対話も大事であり、お客さんの求めるものを考え

ながらの仕事なのだと分かりました。「徐々にお客さんが増え、楽器の修理を頼まれて良い楽器を触る機会もあり、モチベーションがあがる」と岡野さん。都会に有名な店が集中するなか、広島などの遠方から来られるお客さんもいるそうです。「自分の技術を認めてもらえたのがすごく嬉しい。自分のやってきたことが無駄ではなかったと実感できました。さまざまなたのつながりもできました。「一つだけ悔いが残るのは、小さい頃可愛がってもらっていた祖母に自分のアトリエを見せられなかったこと」



■(右上)みささ美術館2階のコンサート会場。(左)岡野さんの制作したコントラバス。

と話されていたのが切ないです。

三朝に音楽文化を

鳥取ヴァイオリン製作学校は二〇一一年に開校した、四年制・徒弟制度の学校です。現在二人の生徒さんがいます。少数でもいから、世界で活躍する人材を育てたいという思いで設立されました。「やるからには中途半端で終わらず、一人前になってほしい。入学希望者には面接を行い、場合によっては入学を断ることもあります」。職人の育成に並々ならぬ思いを抱いておられることがひしひ



■ (左上) ヴァイオリン本体の材木。(左中段) 豆鮑。手と比べてみると小さいです。(下) 展示室を見学する取材班。

しと伝わってきます。

「ふるさとの魅力は、何もない、交通の便利が悪い、特色のないこと。だからこそ、新しい文化＝音楽文化をつくることのできるという可能性を秘めている」と語る岡野さん。三朝に移る前、倉吉のアトリエより広い場所に拠点を移したいと思っていたのだそうです。そんなとき、みささ美術館の指定管理者が公募されているのを知り、三朝へ拠点を移し、音楽文化を築こうと考えて、「みささ弦楽プロジェクト」を立ち上げて指定管理者に応募しました。そして、去年からみささ

美術館指定管理者としても活躍されています。

ロックな生き方

岡野さんはバイク好きで、学生の頃にバイクを購入し、なんとアマチュアレースに参加したこともあります。バイク事故で右肩にプレート入っているんだとさりと言われ、取材班一同が驚きました。「ロックにはクラシックにはない魅力があるんです」。ロックが大好きで、高校時代はバンドでドラムを叩いていたそうです。話を伺っていると、楽器製作や

美術館経営、音楽に対する熱意・情熱がひしひしと伝わってきて、とてもロックな生き方をされていると感じます。理想を実現する力も備わっていらっしゃるのがすごいです。

地産の木で弦楽器を！

今後の目標・活動方針について尋ねると、熱心に教えてくださいました。現在、みささ美術館は三朝町からの補助をうけて経営していますが、岡野さんは「補助で成り立つものに永続性はない」と、四年以内に独立することを計画し、持続的に文化を作り上げようと努力されています。

コンサートの公演回数の増加、現在の建物建て替えて町の景観に合うようにする、ヴァイオリン製作に関するミュージアムということが分かる名称への変更など、さまざまな目標があるそうです。将来の美術館がとも楽しみます。

製作者としての今後の目標は、三朝町産のトチの木を利用したヴァイオリン・ヴィオラ・チェロ・コントラバスを作り、それらを地元演奏家がアンサンブルで演奏すること。日本の材木はヨーロッパ産より密度と強度は劣りますが、良質な木を探し、技術で材木を補強して製作するそうです。

「地産の木を利用し、地元の人に演奏してもらうことに意味があるから、製作はボランティアで行います」。四本の楽器が製作できるトチの木は探している最

中とのことで、早く見つかれば、地元産の弦楽器が演奏されることが楽しみです。

取材を振り返ると、私が一つ質問をすると、聞こうと思っていたこと以上の答えが返ってきて、岡野さんの弦楽器製作にかける情熱、この地に音楽文化を築くという大きな志がすぐく伝わってきました。三朝の音楽文化の発展と、岡野さんの今後の活躍を願いつつ、この記事でさまざまな人にみささ美術館を知って頂けたら、と思います。

(かがわ・しおり／日本語文化系一年生)



■鳥取ヴァイオリン製作学校の前で記念撮影。

地域に根ざす、 子どもたちのオーケストラ

——倉吉ジュニアオーケストラ——

香川詩保里



雨の降る土曜日の午前、子どもたちがヴァイオリンを手に練習をしている最中に、取材班はお邪魔しました。

取材したのは倉吉ジュニアオーケストラです。倉吉ジュニアオーケストラ（通称ジュニアオケ）は鳥取県の中郡、倉吉市を主な活動拠点とし、ヴァイオリン・ヴィオラ・チェロ・コントラバスの弦楽合奏団として結成された任意団体です。メンバーは小中高生が対象となっており、初級クラスと上級クラスに分かれており、今回は初級クラスを中心に取材しました。

かつて私もこのジュニアオケの初級クラス・上級クラスでヴァイオリンを教わっていたので、鳥取県中部で育つ弦楽器文化を少しでも多くの人々に知ってほしいという思いで取材先を選びました。

倉吉ジュニアオーケストラとは

倉吉ジュニアオーケストラは平成六



（一九九四）年に結成され、今年で二十周年を迎えます。平成七（一九九五）年八月に結成記念演奏会を開き、今までに二十回近くの定期演奏会が開かれています。また、平成十五（二〇〇三）年からは、ジュニアオケ各メンバーの合奏技術と個人技術の向上を目的に、弦楽フェスティバルという名の演奏会が毎年開かれています。児童・生徒の段階で弦楽器に親しみ、演奏技術を習得して、将来一般社会でオーケストラ活動に参加できるようにすることが目的です。

指導者は、代表兼指揮者を務める山田衛生先生（74）他、五名おられます。五名とも、倉吉室内合奏団という、社会人向けの弦楽合奏団の団員であり、うち三名はヴァイオリン教室をもっておられません。運営は、指導者と保護者で行われています。

倉吉ジュニアオーケストラ代表兼指導者の山田衛生先生に、結成のきっかけな



どを伺いました。

倉吉ジュニアオーケストラ結成は、平成十（一九九八）年に第二十二回全国高等学校総合文化祭・器楽管弦楽部門が鳥取県で開催されることに備え、小中学生の段階で弦楽器に触れて技術を磨き、高校生になったときに総合文化祭でオーケストラに参加できる人材を育成しようとして結成されたそうです。

当時、山田先生は倉吉市内の高校で音楽教師をされており、総合文化祭の鳥取県合同オーケストラの指導者兼指揮者を

する予定だったため、その数年前から倉吉に小中学生向けのオーケストラを作っておこうと働きかけたのだそうです。「基礎的なことを小中学生の段階で身につけたほうが、高校から始めていきなりオーケストラで弾くよりも、演奏の幅が広がるから」とおっしゃっていました。

初級クラスと上級クラス

初級クラスは、弦楽器初心者のために平成十五（二〇〇三）年「鳥取県子ども文化スクール支援事業」によって新設さ

れました。鳥取県からの助成金を受け、楽器は無料で貸与されるので、弦楽器を始めやすい環境が整えられています。毎月第二・四土曜日の九時～十時半、リフレプラザ倉吉（倉吉市住吉町）で練習が行われています。入団対象は、小学四年生から高校一年生までの、弦楽器を始めた初心者で、練習に参加でき、自宅でも練習できる子どもです。現在のメンバーは第七期生で、男女含め十名が練習に励んでいます。今年のメンバーはみな、人気のヴァイオリンでした。

初級では、初めに楽器の構え方、音の出し方（弓のボウイング）、音階練習を学びます。次の段階では、初級用のテキストで、『きらきら星』などの易しい曲から順に練習していきます。基本は重要なので繰り返し練習します。

上級クラスは結成当時から続いており、一定の演奏技術を習得した小中高生を対象としています。具体的には、ヴァアルディ作曲『協奏曲イ短調 第一楽章 アレグロ』という曲が弾ける程度の技術が求められます。現在は、中高生十人程度で構成されています。

「ヴァイオリンを弾いてみたいと思った」

今回取材した初級クラスは、今年の四月から始めたばかりの小中学生のみのメンバーでした。私たちが訪れたときは、三人の先生がそれぞれ三、四人の子を指導するグループ練習の最中で、子どもたち

は真剣な顔で教わっていました。そのあとの合奏練習では、弓のボウイング（弓の上がり下がり）が逆になるなどのミスもありながら、一生懸命取り組む姿が印象的でした。

練習が終わったあと、初級クラスの子どもたちにインタビューをしました。ヴァイオリンを初めたきっかけを尋ねると、小学校で配られたチラシを見て興味を持った子が多かったです。ある女の子は「ヴァイオリンの演奏を聴いて、私も弾いてみたいと思った」と話してくれました。私も同じだったなと懐かしく思い出しながら話を聞いていました。「音楽に興味はなかったけど、親に勧められて入った」と、保護者の方の勧めで始めた子もいるようです。「ヴァイオリンを弾いていて楽しい？」と尋ねると、ほとんどの子から「楽しい」と返ってきました。

取材で懸命に練習する子どもたちを見て、改めて弦楽器を弾く楽しさを思い出した気がします。弦楽器を習うには、通常高い費用がかかり、環境が整わないと続けることが難しいです。しかし、倉吉ジュニアオーケストラは鳥取県の支援を受け、子どもが弦楽器を始めやすい環境が整えられており、本当に恵まれています。ジュニアオーケが今後も継続して弦楽器に親しむ子どもの育成を進め、将来も室内楽団や趣味などで続ける人が増えることを心から願っています。

（かがわ・しおり／日本語文化系一年生）



枕木山華蔵寺での

プチ修行体験

佐々木麻衣

私たち一年生五人組は、松江市の龍翔山華蔵寺（通称「枕木山華蔵寺」）で一泊二日のプチ修行体験に挑戦してきました。

至っています。

プチ修行一日目

八月七日午後三時、短大に集合。ハイ

私は以前から、華蔵寺に縁がありました。高校生のとき「観光甲子園」に出場し、日本一にあたる文部科学大臣賞を受賞したのですが、その際に考えたプランのメインに華蔵寺があったのです。その縁で私は、何度か精進料理や抹茶をいただいたり、坐禅を体験させていただいたりしました。そこで、このたび『のんびり雲』の取材をするにあたって、高校生の時に体験できなかった「宿坊体験」に挑戦したいと考えたのです。

エースに乗り込み、鹿野先生の運転で出発。今回初めて、『のんびり雲』の一年生編集委員が五人そろって取材します。この日は雨の予報でしたが、不思議と天気に恵まれ、晴れた中でのスタートです。夕方四時ごろ、華蔵寺の駐車場到着。私たちは宿所に荷物を置き、まずは住職がお名前は、吉元玄進さん（61）です。

華蔵寺は、松江街地の北東にある枕木山の山頂に位置していて、臨済宗南禅寺派に属する禅寺です。出雲國神仏霊場の第七番札所でもあります。平安時代後期に創建され、戦国時代に一度焼失しましたが、約四百年前に再興して現在に

その後、華蔵寺の境内を散策しました。駐車場は境内の一番北側にあり、私たちの宿所は駐車場に隣接しています。宿所から少し南に離れて、大きく古い本堂と庫裏があり、庫裏の東に札受所の新しい棟が建っています。

本堂から南に百メートルほど離れた場所には、これまた大きく古い薬師堂があ

ります。屋根の上には、緑青色の大きな丸い球が乗っています。薬師堂の中には重要文化財の薬師如来像が安置されていますが、今回は拝観していません。

薬師堂から東に少し歩くと、展望台になっています。展望台からは、大根島を浮かべた中海と、弓ヶ浜に連なる大山を望むことができますが、この日は曇っていたため大山は見る事ができませんでした。でも、「ベタ踏み坂」こと江島大橋はよく見えました。ヒグラシがすぐ近くで鳴いていました。

散策の後は、早速、般若心経の写経体験です。庫裏の玄関から入ってすぐ奥の部屋で、三人ずつ向かい合ってイスに座ります。長い木の机の上には、手本とその上に薄い紙が置いてあります。手本には、「観自在菩薩行深般若波羅蜜多時……」と漢字ばかり並んでいます。手本をなぞって、一文字ずつ書いていきます。私はサインペンで書きましたが、ペン



■ (左上) 夕食の精進料理。(右上) 坐禅をする筆者。(中) 樹齢百年を超えるツツジ。(下) 最後に拝んで帰りました。

先が太くて文字がつぶれてしまいます。香川さんと伊藤さんは、筆ペンでゆっくり丁寧書いていきます。後で住職から、一文字一文字に集中しながら書くことが大事なのだを教えていただきました。そうすると、一時間かかるものだと。私は、そこではじめて、写経も修行だったのだと理解しました。

備をしてくださった精進料理です。カボチャや茄子の煮物、胡麻豆腐、冬瓜、厚揚げ、そしてゴーヤの漬け物などを、住職が何度も台所と往復しながら、私たち一人ひとりの盆に運んでくださいます。お味もとても奥深く洗練されていて、野菜の味を活かす工夫がなされています。茄子が苦手だという伊藤さんも、「この茄子はおいしい」と食べていました。私はゴーヤが苦手なのですが、みんなか

ら「修行だ」と言われたので、がんばって食べました。一皿の分量は多くないのですが、最後にはみんな満腹していました。夕食後はどしゃ降りになっていて、宿所に戻らずに、お風呂が沸くまで本堂で坐禅をすることになりました。庫裏から渡り廊下を通って本堂にはいります。電球の灯りの中で、私たちはそれぞれ思い思いに坐禅に取り組みます。座布団が二枚あり、一枚は折りたたんでお尻の下に敷きます。住職は、「座り方は、足を組んでもよいし、あぐらでも正座でも何でもよい。目は閉じるのではなく、半眼で」とおっしゃって、庫裏の方へ行かれました。

だいたい一時間ほどの坐禅でしたが、私は足が痛くなり、何度も足を組みかえていました。食事の後のせいか、一日の終わりに近付いているせいか、どこからかイビキのような音も聞こえてきます。私も大分眠くなり、姿勢を楽にして少し

ウトウトしていました。そんな時、住職が庫裏から戻ってこられました。そして、私たちに教えてくださいます。「坐禅とは、煩惱を払うものだと考えている人がいるが、そうではない。坐禅とは、自己を見つめるためのものだ」とおっしゃったのです。私は、その言葉にハッとしました。眠いとかつらいとか、さまざまな煩惱を払おうとすればするほど、結局、煩惱から逃れることができなかつたからです。よし、次は自分と向き合おう！

坐禅が終わると、時刻は八時になっていました。ようやく入浴の時間です。が、グループに分かれてお風呂に入ったので、少し時間がかかってしまいました。全員の寝る支度が整ったのは、夜中の十二時頃でした。翌朝は四時起きです。早く寝付かないと！

プチ修行二日目

午前三時半、時計のアラームが鳴り響きます。私は何とか起き出して、部屋の電気をつけます。他のメンバーに「起きて」と声をかけますが、なかなか布団から離れようとしないう人も……。それでもようやく布団から出て、全員の身支度が完了したのが四時半でした。すでに本堂からは住職の読経の音が聞こえます。私たちも急いで本堂へ向かいます。

昨日と同じ場所に座って、それぞれ坐禅を開始します。しばらくして住職は読経を終え、電球を消して庫裏の方へ。本



■ (右上) 写経をする取材メンバー。(右下) お札に印を押す作業中。(左下) 展望台から見た風景。

堂は真っ暗になりました。雨が大屋根を打つ音が、急に大きくなりました。

いつまで坐禅をするのか、今何時なのかすら分からないまま、ひたすら坐禅をしていました。半眼を保つことが難しく、意識していないとすぐに目を閉じてしまいます。目を閉じると、夢の世界に入り込んでしまいます。半眼を保つことによつて、いま坐禅をしている自分に意識を向けることができます。時々足を組みかえながら、必死に姿勢を保ち続けていると、次第に窓の外が白んできました。

前日の夜の坐禅と同様に、頃合いを見て住職が戻つてこられ、「禪の修行には『大信根』『大憤志』『大疑念』という三つの条件が揃っていないといけない」と、今度は難しいことをおっしゃいます。

大信根とは、坐禅修行をすれば必ず迷いの世界を脱して悟りに到ることができるという確信です。大憤志は、修行に伴うどんな苦しみをも乗り越えて行く、という決死の覚悟です。これは、しっかりとした問題意識を持つということでもあるそうです。大疑念は、人生に対して抱いた疑問と自分とが一つになって、まるで疑問の塊りにならなければならないということなのです。この三つを合わせ持つていなければ、禪の修行は決して全うできないのだそうです。

確信も覚悟も持たず、問題意識にも乏しいけれど、悟りだけは得たいと考えている安易な私たちは、禪の世界の奥深さと厳しさに触れて、思わず身をすくめて

しまいました。

そんな私たちの心を知つてか、住職は「坐禅をしているときだけが修行ではない。いついかなる時も禪の修行なのだ」と続けます。私たちは、「厳しくつらい坐禅だけでなく、生活そのものも修行なのだ」と考えて、少しホッとしました。どこまでも安易な私たちです。

しかし、朝食をとるために庫裏へ移動する途中、渡り廊下に掛けてあった時計を見て、私たちは二時間も坐禅していたことを知りました。

朝食は、お粥とお漬物でした。お寺の朝食がシンプルなことには驚きましたが、本堂は気温が低く、身体が冷えていたので、お粥の温かさが身に沁みました。その後、住職が抹茶を点ててくださいました。茶菓子は「山川」です。山川は、松平不昧公が好んだ菓子のひとつであり、「若草」「菜種の里」と並ぶ松江三大銘菓の一つです。華蔵寺と松平家との縁を感じながらいただきました。

プチ修行の終わりに

住職とゆっくりお話をする機会がなかったのですが、朝食後、華蔵寺の歴史などについて聞かせていただきました。

華蔵寺の創建は、なんと平安時代の桓武天皇の時代にさかのぼり、延暦年間(約千二百年前)に天台宗の僧、智元上人が建てたと伝えられているそうです。私たちが写経をした部屋に古い仏像が安置してあったのですが、これはその当時に作



■ (上) 住職と記念写真。(下) 紙飾りを作る取材メンバー。

られた地藏菩薩なのだそうです。もともとは天台宗の寺でしたが、鎌倉時代になって、華蔵寺参道に湧き出ている「杉井の霊水」で亀山法皇のご病気を癒したことから、亀山法皇とゆかりの深い南禅寺の末寺になりました。その当時は、枕木十二坊と呼ばれるほど、隆盛を極めたそうです。

戦国時代には、毛利氏と尼子氏の戦で寺のほとんどが焼失してしまいます。これを機に華蔵寺は衰退しますが、薬師如来像や地藏菩薩像などは、当時の修行僧が避難させていたので戦火を免れ、現代に至っています。

を築城したとき、華蔵寺は城の鬼門を守る祈願所として復興します。その後、一六五七年になって松平直政が伽藍を再興することになります。現在の華蔵寺の建物は、ほとんどがその時建てられたものです。

華蔵寺には、本堂の裏に殿様専用の御成の間があり、本堂から御成の間へ通じる擬宝珠のついた橋も残っています。私たちが写経したのは、一番家老の部屋だったそうです。太い柱には釘隠が施されており、襖には三つ葉葵の紋があらわれています。

本堂と御成の間、一番家老の部屋と渡り廊下に囲まれた空間は、中庭になって

のんびり雲 第7号 (2013年)

巻頭エッセイ◎愛しきわが出雲 竹内まりや

特集◎山陰港町紀行

- 西郷(隠岐の島町) 小伊津(出雲市)
- 赤碕(琴浦町) 恵曇(松江市)
- 五十猛(大田市) 鷺浦(出雲市)
- 宅野(大田市) 境港(境港市)

山陰の食材で天ぷら大試食会

- みんなが笑顔になれる店 時計修理 アトリエ・ナベ (出雲市)
- 心をつなぐ、あったか朝市——溝口町朝市グループ——
- ひとと絵本の縁をつなぐ えほんやとこちゃん (米子市)
- につぼん丸で出雲大社へ
- 島根のかるたびと
- 商店探訪◎さくら文庫・かつば書房 (松江市)
- objects 水辺の器屋 (松江市)
- 石見神楽の魅力伝える 有福神楽保持者会を訪ねて (浜田市)
- 街のおもしろ文化観察学入門◎大社編
- 松江に生きる Flat Style (松江市)
- 奥出雲町阿井のシンボル 鯛ノ巣山
- 天野紺屋 五代目 天野尚さんに聞く 藍染めの不思議 (安来市)
- 清流が育むやさしい味わい 小椋さんのワサビ (倉吉市)
- R 4 3 1 物語④弓はま緋 (米子市)



います。そこには、高さは五〇センチほどですが、約六メートルに渡って枝を広げた、樹齢百年を超える一本のツツジの木が植わっていました。雪が降ると、枝は地面に着くのだそうです。仏像や建物だけでなく、こんな木も隠れているとは！ 華蔵寺の凄さを感じました。

最後に、晴れていれば庭掃除をする予定だったのですが、生憎の雨だったので、住職に代わりの仕事をさせていただきました。

私と鹿野先生は、参拝者にお渡しする住職手書きのお札に、三つの印を押す作業をしました。他の四人は、法要で使う五色の紙飾りを作る作業をしました。どちらも何百枚と枚数がとても多く、最初はあてのないものに思っていました。が、目の前の一枚一枚をより良いものにしようと考えながら作業を進めると、楽しくさえありました。いま思えば、これも禅の修行だったのです。

住職は、私たちが作業をしている間に、別のお寺の法要に行かれました。私たちは、お札と紙飾りの束を机の上に置いて、身支度を調べてからハイエースに乗り込みました。外は雨でしたが、私たちの胸の中は清々しさで溢れていました。吉元 玄進住職、ありがとうございました！ (ささき・まい/文化資源学系一年生)



石見神楽には欠かせない横笛の工房 横笛ヒーロー社

(江津市桜江町)

竹内早紀

島根県西部に伝わる石見神楽。私の故郷である江津市桜江町には、神楽の社中が十団体もあります。そしてその中には、国の重要無形民俗文化財に指定されている大元神楽を伝承している団体もいくつかあります。

今回は、そんな神楽の盛んな桜江町で、神楽には欠かせない横笛を製作する「横笛ヒーロー社」(以下「ヒーロー社」と略)を取材しました。

七月三日午前十時四〇分、私たち二年生五人は、江津市桜江町川戸を目指して短大を出発しました。天気は雨。国道九号線をひたすら西へ。サンピコ江津を過ぎてから左折。少し山道を行くと、国道二六一号線に出ます。江の川に沿って上流へ約八キロ走ると、前方に桜江大橋が見えてきます。この橋を渡ってまっすぐ突き当たると、三江線川戸駅。目指すヒーロー社は、駅の約五〇メートル手前になりました。

昼食を食べて午後二時前、いよいよヒーロー社を訪問します。ヒーロー社は、えびや衣料品店に併設されています。迎えてくださったのは、船津重信さん(92)と山田かつ子さん(65)のお二人。店内に入ると、正面のコーナーにたくさんの横笛が陳列されています。左の部屋は事務室兼笛工房、右のスペースには衣料品が並んでいます。椅子を用意してくださっていたので、笛のコーナーに座って取材開始です。

■ヒーロー笛の誕生

席に着くと早速、「今日は遠いところからわざわざありがとうございます。」と大きな声で話を始められました。

私は船津重信、大正十年十二月一日生まれの九十二歳です。私はヒーロー笛という笛を作っていて……と大きな声で話を始められました。

日本の伝統的な横笛には、「本笛（ほんふえ）篠笛」と「ヒーロー笛」があります。船津さんがヒーロー笛を作り始めるまでは、神楽の笛は本笛が主流でした。このフルートと同じで、出した息の一部しか音になりません。音を出すだけでもとても難しく、吹けるようになってからも、何曲も吹き続けると疲れ切ってしまう。だから、女性や子どもが吹きこなすことはとても難しいのです。



ける「ヒーロー笛」を作り出したのです。ヒーロー笛は、リコーダーと同じ原理で鳴ります。横穴（吹き穴）から吹き込んだ息がすべて音になるので、誰でも楽に音を出すことができます。しかし、このヒーロー笛が完成するまでには、とても長い年月がかかったそうです。

船津さんは子どものころから石見神楽が好きで、なかでも笛の音色が大好きでした。二十二歳のときには兵隊として中国へ行き、三年半を過ごしました。昭和二年、二十五歳で故郷に帰ってきた船津さんは、何か特技を身に付けたいと考えて、好きな笛をマスターしようと思いいちました。しかし、本笛ではなかなか音を出すことが出来ませんでした。

昭和三十年頃からは、「自分でも笛を作りたい！」と思うようになりました。そんな時、戦後間もないころに出会った「改良笛」のことを思い出しました。島

根県浜田市辺りで始まったとされる改良笛。その当時は音が悪いという印象だけが残りましたが、「横穴から息を吹き込んで音を出す笛」には興味を持ち続けていました。

昭和五十四年七月、船津さんが五十八歳の時、印象的な出来事が起こります。船津さんが地元の消防団の打ち上げに参加した時のことです。参加者の一人、田中武雄さんが笛を吹き始めました。その笛は改良笛でしたが、感動するほどきれいな音色でした。

しかし、一番驚いたのは、田中さんは神楽に関してはまったくの素人だったという事です。船津さんが「どうしてこんな難しい神楽の曲を覚えられたのですか？」と聞くと、なんと田中さんは、「この笛は大変楽な笛だよ！ 口笛でリズムを取っていたら自然に吹けるようになった」と言っていたそうです。

これが、船津さんと改良笛との二度目の出会いでした。この出来事をきっかけに、船津さんは本腰を入れて改良笛を作り始めました。

■笛がヒーロー

それから約二年間の試行錯誤の末に、船津さんはいよいよヒーロー笛を完成させます。最初は、人に依頼されれば作るというスタイルでしたが、もっとたくさんの人に吹いてほしいと考えた

船津さんは、平成十二年、七十八歳になつてから横笛のお店を出します。「横笛ヒーロー社」の誕生です。

船津さんは、自分が作成した改良笛に「ヒーロー笛」という名を付けました。ところで、この「ヒーロー笛」という名前にはどういった意味があるのでしょうか。この質問には、「笛を吹く人がヒーローじゃない、この笛自体がヒーローなんだ！」と言っておられました。この笛が優秀だから、ヒーローなのだそうです。

ヒーロー笛が生まれるまでは、横笛はすべて「篠笛」と呼ばれていました。篠竹で作られた笛という意味です。ヒーロー笛ができてからは、ヒーロー笛と区別するために、従来の篠笛は「本笛」と呼ばれるようになりました。それほど、ヒーロー笛は人びとに受け入れられていったのです。

このヒーロー笛にはたくさん種類があります。代表的なものは、「石見神楽笛」と「篠笛調ヒーロー笛」の二種類です。この二つの違いは、調子があるかないかです。篠笛調ヒーロー笛は「六本調子（約四十四・五センチ）」から「十一本調子（約三十七センチ）」まで六つの調子に分かれています。調子は笛の長さに依存していて、笛が長ければ長いほどより低い音が出ます。

石見神楽笛には、指穴が六つ開いており（六穴）、高い音が出るので神楽の囃子を演奏するのに適しています。それに対して、篠笛調ヒーロー笛には、指穴が



■(上) 店内の看板。(二段目、右) 自分に合った笛を探す取材メンバー。(三段目) 船津さん、山田さんと記念撮影。(右下) 笛とものさし。(左下) 芯。

とても丁寧に教えてくださったのを今でも覚えています。

初心者の方たちでも、簡単に音を出すことはできました。しかし、曲を演奏するとなると、けっこう難しかったような思い出があります。それでも何カ月か練習するうちに、なんとか形にはなりました。ヒーロー笛は、本当に誰にでも吹ける笛なのだということがよく分かりました。

神楽の笛は主に男性が吹きますが、最近では女性や子どもでも笛の演奏ができる人もいます。地元の神楽社中では、小学生の女の子が、神楽の公演でとても上手に笛を吹いています。船津さんのヒーロー笛のおかげです。

お話を一通り聞いた後、取材メンバーは店内の笛を手にとって吹き始めました。笛は、全部同じように見えて、一本一本長さも大きさも違います。人によってその人に合った笛も違うので、自分に合った笛を見つけることができるようにたくさん置いてあるのだそうです。店内の「御自由に好みの笛をお選び下さい」という看板には、このような思いが込められています。

ここで、船津さんから「好きな笛、ひとつ持って帰りなさい」とのお言葉が。なんと、笛を一人一本ずつプレゼントしてくださいというのです！ 私たちは、大喜びで笛を選び始めました。

店内には、笛を入れる袋(笛袋)も売られています。きれいな柄の袋がたくさん

ありました。なんとこれは、すべて山田さんの手作りです。着物の布をリメイクして作っているそうです！ この笛袋もプレゼントしていただきました。たくさんある中から自分の好みの色・柄のものを選び、本日の取材は終了です。

最後に全員で写真を撮りました。外に出てみると雨は上がっていました。私たちが車で帰るときも、船津さんと山田さんは外に出て手を振ってくださいました。

■船津さんこそヒーロー

八月十二日、もう一度ヒーロー社にお邪魔しました。この日は、前回見落とした笛の工房を見せていただきました。工房に入ると、左手前の壁にたくさんのお物差しが掛けてあります。これらは、船津さんが製作するさまざまな種類の笛の長さや穴の位置を示しています。船津さんの長年の努力と工夫の結晶と言ってもいいでしょう。

「ヒーロー笛を完成させるまでに苦労されたことはありませんか？」と質問すると、船津さんは即座に「芯を作ることに」とおっしゃいました。芯(芯木)は、写真のような形をしていて、笛の内部に差し込んであるので外からは見えません。実はこの芯がヒーロー笛独特のパーツで、ここには船津さんの工夫がいっぱい詰まっています。

芯の材料は、柔らかい桐の木です。この芯は、中央から少しずれたところ(吹

材質が堅いので、竹よりも良い音が出るそうです。

■誰でも吹けるヒーロー笛

ヒーロー笛の音の出し方を説明しているとき、船津さんは「さくらさくら」や「荒城の月」、「神ばやし」や「鬼ばやし」を何度も吹いてくださいました。「年寄りで、息が続かんけえしゅわい」と笑いながら言っておられました。

船津さんは、今もう辞めておられますが、平成七年から桜江中学校で横笛の講師をしていました。実は、私もその生徒の一人なんです！ 郷土芸能を学ぶ授業で、横笛と和太鼓を教わりました。その時に練習していた曲が、「さくらさくら」や「神ばやし」、「鬼ばやし」でした。

六つのものと七つのももの(七穴)があります。演劇で場面の情景を表現するために用いられたり、お祭りの田植え囃子などに使われたりします。この七穴の笛は、関東や東北地方からの注文が多いそうです。

その他にも、ヒーロー笛には、ドレミの音階がはっきりしている「古代笛」、より高い音の出る「鬼笛」、長さが短く指穴と指穴の間隔も狭い「ジュニア笛」があります。

そして、どの種類の笛にも、節間の長い特別な篠竹を使った「竹製」と、温水器用の水道パイプを使った「パイプ製」があります。笛といえば竹製ですが、船津さんは、安く材料を入手できて加工しやすいパイプでも、笛を作っています。

き穴の位置に相当する部分)が深く削っており、そこから右端へ向かって緩やかな傾斜がつけてあります。先端は「ハネ」と呼ばれていて、少し突出しています。ハネは鳴り穴の左端に一致していて、ハネと竹との間にはごくわずかな隙間があります。吹き穴から吹き込まれた息は、この隙間を通過するときに音となるのです。

以前は、堅いヒノキを削って芯全体を作っていました。木でハネを作ると、作るのに時間がかかるうえに、長時間吹くと湿って膨張し、音が変化してしまうという問題がありました。ここで船津さんは、「このハネをビニールに替えよう!」と思いつきました。そうすることで、作る工程も簡単になるだけでなく、ハネが湿ることもなくなるので一晩中吹けるようになります。



に桐の棒全体を削ります。そして、鳴り穴の位置に合わせて棒を切断し、吹き穴の部分からハネにかけて削っていきます(船津さんは「舟底型に削る」と表現します)。ここで船津さんは、削った部分に赤いマジックで色を塗ります。これは、「まじめに作ってますよ」という印なのだそう。

次に、ハネの部分を作ります。ハネの材料は、ホームセンターで売っている赤い硬質塩化ビニール板です。これを一・五センチ四方にカットし、芯の先端に接着剤で貼り付けます。ハサミで大まかに切ってから、ヤスリで形を整えます。これで芯はほとんど完成です。

最後に、良い音が出るように芯を調整していきます。芯を笛に差し込んで、実際に吹いて音を出してみます。そして、吹き穴から息が当たる部分の深さと角度や、ハネの出っ張りの長さや尖り具合を、何回も微調整します。この作業は、一ミリの十分の一単位の細かさで行われ

ます。最終的に、どの指穴からも特徴のある音が出るようになったら、芯を接着剤で笛に固定して、「これで絶対せやない!」の一言。ヒーロー笛の完成です。

芯はすべて船津さんの手作りなので、一つひとつ微妙に違います。だからこそ、ヒーロー笛は一本一本すべて、音色や音の出し具合が異なるのです。私が驚いたのは、船津さんがすべての工程を自分の感覚だけでやっておられたことです。長年作り続けてきた船津さんには、すべての工程が自分の身体に刻み込まれているのです。

最後に船津さんは、「石見神楽の三大要素は、①衣裳が派手、②リズムがいい、③笛がいい」と、胸を張っておっしゃいました。

石見神楽は、郷土芸能としては珍しく、若者から子どもや女性まで、多くの人びとに支持されています。その要因としては、衣装や演出など見た目の派手さ

と、八調子と呼ばれるテンポの良さに加えて、あまり知られていませんが、この「誰でも吹ける」ヒーロー笛の存在が大きいのです。

残念ながら、船津さんの後を継ぐ人はいません。それでも、なんとかヒーロー笛を残していきたいという思いから、私たちにも作り方から仕組みまで、事細かく教えてくださいました。船津さんには、私心というものがまったくありません。そんな船津さんの人柄もあって、ヒーロー笛は多くの人びとに愛され、石見神楽を支えているのです。

私は、生まれ育った松江町の宝を紹介したい!という気持ちでヒーロー笛の取材を始めましたが、船津さんの功績といまのお気持ちを思うと、取材中に何度も涙が出そうになりました。船津さんこそが、地元の宝(ヒーロー)だったのです。どうかいつまでもお元気で、活躍されることをお祈りしています。(たけうち・さき/文化資源学系二年生)

■ (上から順に) 笛の芯を作る工程。



現地で味わう神話の世界 —舞台 黄泉比良坂—

(松江市東出雲町)

長嶋恵里香

松江市東出雲町の掛屋にある、「黄泉の国(あの世)と現世の境目」とされる黄泉比良坂。取材日は暑い日が続いている七月中旬でしたが、この日の天気は雨のち晴れと暑さの少し抑えられた、まるで私たちを歓迎しているかのような天気でした。

現地では、看板を見て小道に入ったはずなのに迷ってしまいました。たまたま通りかかった近くの住民の方に尋ねると、「ついできてください」と、車で先導してくださいました。この町は私の地元ですが、人の温かさに感動しました。

■実際に神話の世界へ

黄泉比良坂には神話をもとにした物語があります。現地に置いてある、比良坂神蹟保存会が公開している「黄泉比良坂物語」というパンフレットから内容を抜粋して紹介します(次ページ)。

この神話について楽しく知りたいと思い、現地で実際にシーンを演じてみようということになりました。神話の中に実際に登場するとされている場所で写真を撮影しました。この日の取材班は総勢十四名で、にぎやかに撮影をしました。イザナギノミコトを演じたのは総合文化学科二年の大里佳澄さん、イザナミノミコトを演じたのは同じく原田未来さん、醜女はその他七名で演じました。天つ神を演じているのは総合文化学科教授の小泉凡先生です。演出は私、長嶋が担当しました。



②



①



③



④



⑤

①男神伊邪那岐命（いざなぎのみこと）、女神伊邪那美命（いざなみのみこと）の二神は、天つ神の「お前たち二人心を合わせて国土を生み、もろもろの神々を生んで、天の下の国と神々を立派に作るように」との仰せに従い、……国土を作られ、次にはその国に住む様々な神々をお生みになり、最後に火の神をお生みになったが、この時、伊邪那美命は女の大切な女陰を焼かれてお亡くなりになった。

②伊邪那岐命は亡くなった妻の伊邪那美命に逢いたくて、後を追いかけて黄泉の国へ行かれた。しかしここは死者だけのいる国であった。伊邪那岐命は大声で「わが最愛の妻伊邪那美よ。お前と二人で作った国はまだ作りおえておらぬ。早く還ってほしい」といわれた。けれども伊邪那美命は「それは残念でした。……私はもう黄泉の国の食べ物食べてしまいました。でもあなたがわざわざ迎えに来てくださったので、何とかして還りたいので、黄泉の国の神に相談してみましよう。しかし私が返事を申し上げるまでは絶対に来られてはいけませんよ」と消えていかれた。

③伊邪那岐命は待てども待てども返事がないので、とうとうしびれを切らし約束を破って真っ暗な黄泉の国へ「入ってしまった。すると」そこには体中に蛆のわいた伊邪那美命が横たわっており、……ふた目と見られぬひどい姿であった。

④驚いた伊邪那岐命は恐ろしくなって一生懸命逃げ還ろうとされた。ところが伊邪那美命は「あれほどこへ来られぬようにと約束したのに……」と大へん怒り、黄泉の国の醜女たちを使って大勢が追いかけた。

⑤最後には伊邪那美命自身が追いかけてこられたので、伊邪那岐命は黄泉比良坂にあった大きな岩で道をふさいでしまわれた。「二人の神はお互いに腹を立て」別離のこぼを交わした。伊邪那美命は「あなたがこんなことをしたからには、これから後あなたの国の人間を毎日千人ずつ殺す」といわれた。伊邪那岐命は「お前がそんなことをするなら私は毎日千五百人の産屋をたててみせる」と仰せられた。そのようなわけで日本の人口は増えるといわれている。



■東出雲支所の方に聞きました

「神蹟黄泉比良坂伊賦夜伝説地」と刻まれた石碑が目の前に見える駐車場で松江市東出雲支所地域振興課の本多千景さん、井川葉月さんからお話を聞くことが



■(左上)支所の方からお話を聞いています。(右上)付け谷に向かう道。遠足気分。(左下)小道具を渡され、興味津々の凡先生。(右下) 髪の毛のセッティング中の大里さん。

できました。

黄泉比良坂は古事記や日本書紀の中で出てくるとき、黄泉の「入り口」としては書かれていないという話が印象的でした。物語の中で出口として描かれること

で、それは「次のステップ」という意味が込められていると語られました。イザナギノミコトが黄泉の国から逃げ帰るとき、その出口で言う台詞はイザナミノミコトの「死」に対する言葉とは反対の「生」に対して前向きな言葉です。

イザナギノミコトはここを出た後、穢れを落とすために泉で禊をします。すると左目からアマテラスオオミカミ、右目からツクヨミノミコト、鼻からササノオノミコトを誕生させます。日本の神話の原点をつくったイザナギノミコトは、黄泉の国を出た後、次のステップを踏んだといえるのではないのでしょうか。

逃げて帰るといふ試練を乗り越え、前向きに進んでいく姿が描かれていることから、この場所には「次に進みたい」という思いを持つ人にご利益があるのではないかと思いました。この取材や撮影を大きな難もなくすすめることができたのは、もしかしたらこの力がはたらいていたおかげなのではないか、と考えたりもしました。

東出雲支所の方に、ここへ来る途中、近所の方が案内してくださったということとを伝えると、こちらの方は道案内に慣れておられるのだと言われたので驚きました。出雲大社の大遷宮や縁結びブームに伴って島根県の観光客が増え、「意宇六社めぐり」というイベントが開催されていることもあり黄泉比良坂への観光客も増えたそうです。

「意宇六社めぐり」というのは熊野大



社・真名井神社・六所神社・八重垣神社・神魂神社・揖夜神社の六社をめぐるもので、江戸時代以降に行われていた「意宇六社参り」が元となっています。そのうちの揖夜神社と黄泉比良坂はセットで観光されることが多いので、そのため観光客の人数が格段に上がったということでした。

話をしていた東出雲支所の方々も黄泉比良坂の伝説に注目し、平成八年からミュージカルに取り組んでおられるそうです。さまざまな場で披露しておられ、今年の県民会館大ホールでの公演は千人のお客さんを動員しました。島根大学の音楽の教授が作曲を、照明や音響もプロの方が手掛け、島根大学声専合唱団のみなさんと島根大学管弦楽団のみなさんの協力などもあり本格的です。

一番初めに公演された「黄泉比良坂」というミュージカルでは、日本照明家協



■ (上) 現実的な看板。(下) 積んである石の奥に「塞の神」といわれる大きめの石が。石を置いてみるイザナギ。

■ 小泉八雲がみた黄泉比良坂

小泉八雲は「古事記」に大変興味を示していましたが、黄泉比良坂の物語は出雲神話の中でも最も気に入った話の一つだったそうです。この物語に魅かれた理由は、その素朴さ、原始性にあったとい

■ 現代に残る、黄泉比良坂

物語の中で、イザナギノミコトが黄泉の国の軍から逃げている最中に、木になつていた桃の実を投げて退散させたという場面があります。それにちなんで実際に黄泉比良坂に桃の木を植えられたそうです。風景を似せたり雰囲気を作りだしたりするため、桃の木を最近植えられたと聞いておもしろいと思いました。

イザナギノミコトが醜女から逃げたとされる道



は「付け谷」と呼ばれていますが、その道中に石がたくさん積んである所がありました。その奥には大きめの石があるのですが、その石はこの道の塞の神とされていて、この辺りの住民はかつて「ここを通るときは石を置いて通りなさい」といわれていたそうです。何か意味があるのではと研究をしに訪れる方がおられるのですが、住民の方は「なぜか分らないけど石を置くように言い伝えられている」とおっしゃるそうです。

塞の神というのは道祖神ともいわれ、町や村の「境界」から悪いものが入ってこないようにしてくれる神を指します。黄泉比良坂物語でイザナギノミコトがイザナミノミコトと離別するシーンがありました。日本書紀には『これよりはいつてはならぬ』として杖を投げられた。これを岐神（塞の神）という」と記されている部分があります。住民の方からすればただの習慣だったものが、実は神話と関係していたかもしれない、というのはすごいことだと思いました。

現在は昔に比べて都市部からの観光客も増え、松江市の大事な観光地として名をはせつつあります。パワースポットというのはいくまで観光のためのうたい文句であることがほとんどかもしれません。私はこの地の力を身をもって感じ、不思議な空間に入り込んだ気分がとても楽しかったです。

黄泉比良坂の物語は一見怖そうに思いますが、神は人間社会の不幸を救う存在として奉られているそうです。イザナギノミコトとイザナミノミコトが夫婦円満の守り神として、産後他界されたイザナミノミコトが女性の守り神として崇められているので、是非多くの人に來てもらって何かパワーを感じてもらいたいと思います。神話を再現してみても、行く場所行く場所に神々の奮闘が見えてとてもおもしろかったです。身近なところに神々の原点があったことを誇りに思い、この物語の継承に貢献できればと思います。

(ながしま・えりか／文化資源学系二年生)

街のおもしろ 文化観察学入門

その九!

～浜田編～

江田靖奈



■(上)移動中の車内。(中)「たじまや」にて、「神楽ケース販売しています」の張り紙。(下)土曜夜市翌日の紺屋町商店街。

二年生編集部員七人と共に商店街を中心に歩き、ゆったりとした時間の流れを感じる事ができました。母に、「昔ながらの店が多く並び、歴史がある商店街が街歩きに向いているのでは？」と勧め

られた場所でもあります。昔から浜田の街並みや雰囲気が好きで、今回、浜田を取り上げることができてとても嬉しく感じています。二年生編集部員の多くは浜田に行ったことがなく、驚きました。知らぬ土地に興味を持ったのか、街歩きには大人数が参加してくれました。

七月六日九時、短大に集合し、ワゴン車に乗って浜田市へと向かいました。約二時間半、ずっと車に揺られていたのでみんな疲れ気味だろう……と思いきや、話し声が絶えない賑やかな車内でした。到着したのは十一時十五分頃。

二年生編集部員七人と共に商店街を中心に歩き、ゆったりとした時間の流れを感じる事ができました。母に、「昔ながらの店が多く並び、歴史がある商店街が街歩きに向いているのでは？」と勧め

られた場所でもあります。昔から浜田の街並みや雰囲気が好きで、今回、浜田を取り上げることができてとても嬉しく感じています。二年生編集部員の多くは浜田に行ったことがなく、驚きました。知らぬ土地に興味を持ったのか、街歩きには大人数が参加してくれました。

てもらった紺屋町へと向かいました。紺屋町は浜田城の城下町として栄えた場所で、染色のお店が多かったことからこの名がついたとされています。

土曜夜市

紺屋町の辺りを歩いてみようと言っているさなか、「たじまや」というカバン屋が目に残りました。そこには、「神楽ケース販売しています」という張り紙が……。気になってお店の方に尋ねたところ、神楽の衣装を入れる



■(上)橋を渡る取材班。(下)地元の幼稚園児が作った七夕の飾り。

ケースのことでした。石見神楽が盛んな地域ならではの商品であると感じました。

天候は生憎の雨。お祭りの後で街の皆さんはお疲れ気味なのか、人通りは少なく静かでした。所々に七夕の飾りがついた笹が飾ってありました。不思議そうにその笹をみていたところ、食堂「自由軒」のお店の方が気さくに話しかけて下さいました。前日行われていたお祭りは土曜夜市というお祭り、紺屋町では夏の間に四回行われるそうです。

七夕も近いということで、笹を三十本用意し、飾りは地元の保育園児などに作ってもらったものでした。短冊はナイロンで作られて



■ (上段・左下) シャッターの絵。(右下) 道路上のカレイとヒラメ。

おり、雨にぬれても大丈夫なように工夫してありました。石見神楽やしまねっこが来たりと、とても盛り上がったそうです。近年は島根県立大学浜田キャンパスの学生さんも参加されており、交流の場の一つとなっています。

紺屋町を進んでいくと、お店のシャッターが閉まっているところが多く見られました。日曜日なので、定休日なのだと思いますが、「佐々木果実」のお店の方にお話を伺ったところ、「前日のお祭りで皆さん疲れておりまして……そ

ろそろしたら開店されると思いますが」ということでした。

紺屋町のシャッター

佐々木果実さんは半分シャッターが開き、半分閉まっている店しようかどうかと考えておられるところだったからだそうで……。そういった自由な雰囲気がとても心地よく感じられました。店主は、中国語講座の本を片手に出てきてくださり、とても中国語が達者でした。テレビの講座でここまで話せるようになるのだと驚きました。

可愛らしい絵が描いてありました。他のお店にも同じように、シャッターに様々な絵が描いてありました。これは空き店舗対策の一環として行われたものでした。平成十七年に完成したシャッター美化事業。絵の描き手は一般募集しましたが、どの絵も味があって商店街を華やかに彩っているように感じられました。土曜夜市では、一斉に商店街の電気を消して、シャッターの絵にスポットライトを当てるような演出もされているそうです。

商店街の活気を取り戻す活動として、シャッター美化事業の他にも、道路の整備、街灯の新設工事が行われました。「珍味屋」のお店の方が、路面はブロックで

舗装され、色の異なるブロックを並べてヒラメとカレイが描いてあること、街灯にも魚のマークがついていることを教えて下さいました。これも、商店街を盛り上げる工夫の一つであり、漁港の街ならではの工夫だと思いました。

愉快な洋食店

歴史あるお店が並ぶ中に、一風変わった洋風のお店がありました。ガラスにはイタリア語と思われる文字でメニューらしきものが書いてあるにも関わらず、お店の名前は「華楽」。お店の前で、「これは何語だろう?」「和風? イタリアン?」などと騒いでいたら、お店の方が出てきて下さいました。

「写真を撮っていいですか?」と尋ねたところ「ちよつと待つてくだささい。帽子を取ってきますから」と言っていてシェフの帽子を取ってこられ、気合十分! 内装も是非撮って下さいと言っていたのですが、「お客様の了解を得ないとさすがに……」と言うところ「了解は得ました」。対応



■ (右上) 船崎ふとん店。(左) シェフとキメ顔でパシャリの船木さん。(右下)「華楽」の店内。

の速さに一同爆笑してしまいました。お店の内装は和風で落ち着いた雰囲気漂っており、人柄のよい店主が魅力的なお店でした。

ふとん屋さんとの縁

歩いていると気になる看板やお店が沢



■ (右上)「制服のカタイ」の巨大な制服。(右下) 刺繍の説明をして下さるお店の方。(下段中) これまで作ってきた刺繍の数々。(左上)「旅館のような家」。取材のお願いをしている間、並んで待つ取材班。(左下) お家の方に取材中。

山目に入りました。創立昭和二十年の「船崎ふとん店」では、「ぼたんわた」と大きく書かれた看板が印象的でした。船崎ふとん店と書かれた文字と同じぐらいの大きさであったため、初めはどちらがお店の名前か分かりませんでした。お店の方に伺ったところ、ぼたんわたというのはメーカーの名前でした。私の両親は、結婚した際にこのお店で布団を買ったそうです。

船崎ふとん店の近くには大きな制服が飾られた「制服のカタイ」がありました。普段着る制服の十倍はあるような大きさの制服が外に飾られ、ショーウィンドーには、普段着る制服の五分の一ほどの大きさの制服が飾られていました。大きいものから小さいものまで作る技術があることをアピールするためのものだと店主の方は言っておられました。隣のお店と繋がっており、そこでは作業服などを取り扱っていました。店の隅には刺繍をする機械が置いてあり、注文通りの刺繍をすることが出来ます。お店の方はとても気さくで笑顔が可愛らしく、心癒されました。

旅館のような家

商店街の端まで歩いたところに、とても立派な家が建っていました。和風の建物に洋風の建物が増築されたような外観で、とても個人宅とは思えないほどの佇まいでした。個人宅ということもあり、話を伺うことにためらいを感じていまし

たが、勇気を振り絞り、走ってインターホンを押しに行きました。

住人の方は快くインタビューを受け入れて下さいました。昭和十年頃には珍しい洋館風建物で、元々は糸屋でした。そのため、洗面所はとても広く旅館のようだったそうです。この建物を買い取った後、住むには少々不便な点がいくつかあったため、リフォームをしつつ暮らしておられます。昔のままのところも多くあり、歴史を感じることもできる建物でした。あまりにも外観が立派なため、旅館と間違えてこられた方もおられたとか……。

時刻は午後一時を過ぎ、そろそろお腹がすいてきたということで、最初にお話を伺った「自由軒」で昼食をとることにしました。みんな相当お腹がすいていたようで、黙々と食べていました。これも昭和八年開業と、とても歴史あるお店で驚きました。キャッチフレーズは「こどもどきから自由軒」。地元根付いた、地元の方から愛されている昔ながらのお店だと感じました。

呉服店の二階には……

お昼の後は、紺屋町の隣にある朝日町商店街に向かいました。歩いていくと、路面に『もん』さんはこちらから」という文字が……。『もん』さんとは？と疑問に思った一同は、矢印の指す方へと向かいました。たどり着いた場所には、お地蔵さんがポツンといらっしゃいまし



た。「もん」さんはこのお地蔵さんのことだったのでしょうか。頭をひねりながら、もと来た道を戻りました。

朝日町商店街を歩いてみると、一風変わった構えの店を見つけました。お店の名前は「フクヤ呉服店」。お店の方にお話を伺ったところ、元々軍人さんが住んでおられたお家だそうです。昭和初期、外国を歩き来る船の中にあつたカウン

ターの飾りがあるということで、お店の二階に上がらせていただきました。木製の、細かい彫りが施された綺麗な飾りでした。

他にも、水牛の角やクジラの骨など珍しいものが沢山ありました。この日はお休みに関わらず貴重なお話を聞かせていただきました。お店の方はどこことなく祖母を思わせる優しさにあふれた方でした。後々聞いた話

■ (左上)「フクヤ呉服店」の外観。(右上) カウンターの飾り。(右中段) 路面上に表記してあった。(右下)「もん」さんと思われるお地蔵さん。(左下) 家の角が鋭角や鈍角になっている。

「みどり会館」を探して

道を行く途中、一風変わった形の家があることに気づきました。家の角は、道路に対して直角であると思いがちだったので、朝日町商店街の一部では家が台形のような形をしていました。鋭角の部分、家の

によると、私の七五三の赤い着物はこのお店で買ったものだそうです。そういった繋がりを知って、とても嬉しく感じました。

みどり会館は今というアパートのよう

みどり会館は今というアパートのよう

みどり会館は今というアパートのよう

みどり会館は今というアパートのよう

その建物を探したのですが、なかなか見当たらないので、「古森金物店」のお店の方に尋ねてみました。すると、つい最近取り壊されたことが分かりました。みどり会館の向かいにある「西岸寺」も新しく建て替えられ、みどり会館があった場所は駐車場となっていました。

よく訪れて、よく知っていたはずの浜田の街が、こんなにも魅力的で人情にあふれる街であったことに初めて気が付きました。いきなり現れ、いきなりインタビューした私達を快く受け入れ、いろいろな話をして下さいました。特に用事がなかったとしても、少し話したい……と立ち寄りたくなるようなお店ばかりでした。皆さんの優しい人柄に触れ、私も幸せな気持ちになりました。お話を聞かせて下さった皆様、本当にありがとうございます。

(えだ・やすな／文化資源学系二年生)

が……。どうして男限定なのでしょう？ 意味は理解しがたいですが、クスツと笑ってしまうような看板でした。

よく訪れて、よく知っていたはずの浜田の街が、こんなにも魅力的で人情にあふれる街であったことに初めて気が付きました。いきなり現れ、いきなりインタビューした私達を快く受け入れ、いろいろな話をして下さいました。特に用事がなかったとしても、少し話したい……と立ち寄りたくなるようなお店ばかりでした。皆さんの優しい人柄に触れ、私も幸せな気持ちになりました。お話を聞かせて下さった皆様、本当にありがとうございます。

中ではどのようなスペースとして使われているのかが気になりました。

私は、浜田に取材に行くことが決まったときから「みどり会館」に必ず行こうと決めていました。外観はとても古く、薄緑色をしてい



■ (上)「みどり会館」跡地。(下)「男は元来ごはん好き」の看板。

編集後記



私がこの「のんびり雲」を知ったのは高校の時に県立短大に入ろうか迷っているとき、進路指導の先生に「これを読んでみなさい」と言われたのがきっかけです。読んでみると、一冊に地元の魅力がたくさん詰まっていて、私も多くの人に雑誌を通して魅力を伝えたいと思いました。だから、「のんびり雲」の制作がたくてこの学校を選んだとも言えます。その念願の「のんびり雲」の制作に携わることができ、本当に嬉しかったです。

雑誌の制作は、一年次の「文化情報誌制作I」の授業でやったことがあったため、正直、今回も大丈夫だろうという安易な気持ちで臨みましたが、想像以上に大変でした。取材でも、聞き逃してしまったり、レイアウトでも写真の配置が上手くいかず、何度もやり直したりしました。

しかし、完成した時に大きな達成感を得ることができ、本当にやってよかったと思います。また、制作を通して、多くの方々に会い、人の優しさをたくさん感じることもできました。今までよりもさらに、地元である島根が大好きになりました。(萌佳)



一年の頃から「のんびり雲」の記事を書きたいと思っていたの

ですが、定員オーバーであえなく断念。二年生になり、はれて「のんびり雲」の編集に携わることができました。

浜田の取材をすると決めた際には、多くの編集部員が興味を持ってくれたため、今回の取材の中では最多の八人で街歩きをすることになりました。頻繁に訪れていた場所だったので、どの風景も当たり前だと思っていました。しかし、よく見たり考えたりするとおもしろいものが沢山溢れていました。

お店の前で編集部員と話していると、必ずと言っていいほど、お店の方が自ら話しかけてきてくださいました。急なお願いにも嫌な顔一つされず、快く受け入れて下さいました。そういった優しい方々に出会うことができ、心が満たされ、幸せな気持ちで松江に帰りました。

何も悩まず原稿はスラスラ書くことができました。私が書ききれなかった魅力も沢山あります。より多くの方に訪れてほしいと願っています。原稿を書く上で携わって下さった方々に感謝しています。ありがとうございました。(靖奈)



高校生の時からやってきたかった『のんびり雲』の制作。去年に引き続き、二年連続で編集に携わることができました。

取材先は私の地元！船津さんとも初対面ではなかったのですが、取材は順調に進んで……と思いきや、このヒーロー笛は思っていたよりもずっと奥の深いものでした。勉強不足のまま取材に臨んだ私は、

思ったように話が聞けず、後日もう一度横笛ヒーロー社を訪れることになりました。二度も取材に同行していただき、何度か記事をチェックしていただいた鹿野先生にはとても感謝しています。

原稿が完成し、「さあ、次はレイアウト！」と思ったころには、二年生で完成していないのは私だけになっていました。文字数が多く、写真が少なくなってしまうしましたが、なんとか完成し、そして今この編集後記を書いています。

雑誌制作はとても貴重な経験だったし、短大生活の思い出にもなりました。たくさんの人に読んでほしいなあと思います。(早紀)



どうも。野草担当、お喋り大里です。私が一通り制作に関わって感じたのは、「のんびり雲」とはたくさんさんの「好奇心」が詰まったものだという事です。野草もただの好奇心でした。この「ただの好奇心」が

まさか雑誌になるなんて……。おかしいですよ(笑)。普通じゃ考えられません。でもこんな小さな思い付きが企画となる。それがこの「のんびり雲」なんです。

びつくりしました。予想を上回る野草のまじりに。そして人間の味覚って無限大なんだと。どれもまずかったですよ。

のんびり雲 第8号

2014年10月20日発行

編集 「のんびり雲」編集部

責任者：大塚 茂
e-mail: s-otsuka@matsue-u-shimane.ac.jp

発行 島根県立大学短期大学部
松江キャンパス
総合文化学科
〒690-0044
島根県松江市浜乃木7丁目24-2
TEL. 0852-26-5525 (代表)
FAX. 0852-21-8150

印刷 今井印刷株式会社
制作協力 小泉 凡 小倉佳代子
制作指導 鹿野一厚 大塚 茂

も、まずいだけじゃなかったんです。ビリビリと舌が毒が走ったような感覚、お喋りな私が黙る程のまじさ。「言葉なんかじゃ表せないってこういう事なんだ」と思いました。いや、「思い知りました」が正しい気がします。普通じゃない事をやるって、不安だけどワクワクの方が勝るんですね。不思議です。

「のんびり雲」制作に関わってる間、本当に楽しくて楽しくて。編集長によると取材に行った回数過去最高記録が私だそう。記事を読むだけでなく、「またこの人いる！」「前の記事より太ってる！」「髪が黒い！」と、ウオーリーを探せな感覚でも楽しめるのではないのでしょうか(笑)。

文章力がなく集中力がすぐ切れる私でしたが、私なりに頑張った結果がこれです。先生や仲間のおかげで無事こうやって編集後記が書けています。(佳澄)